

【自著を語る】

垂髪あかり著

『〈ヨコへの発達〉とは何か—障害の重い子どもの発達保障—』

(日本標準 2020年)

垂髪 あかり (神戸松蔭女子学院大学)

連絡先 E-mail : akasuzu720@shoin.ac.jp

「実践者の多くにはすでに見えている発達」を問う

今から40年以上前の1975年、茂木(1975)は、障害児保育について述べた宮下(1974)の「〈遊びが重くなる〉」という言葉を用いながら、「〈遊びを重くする〉¹⁾」ことによって、そこに参加している個人——障害児を含んで——が、いまできている力をどのような内容をもって太らせているのかを研究することが必要である。それは、〈できる〉ことの数が増大していくことをのみ発達ととらえる、もしくはそのようなアスペクトからのみ発達をとらえる立場からは見えてこない発達であり、現場の実践者の多くにはすでに見えている発達である²⁾と述べた。

重症心身障害児療育(および保育・教育)に関しても、「漠然とした捉え方」であるかもしれないが、「現場の実践者の多くにはすでに見えている発達」があり、「もっと確かな指針を持ちたい」という思いがある。それは特別支援学校教員として、障害の重い子どもたちと向き合った筆者自身の思いでもあった。

本書の冒頭では、筆者の〈ヨコへの発達〉研

究開始の原体験として、新米助産師であった筆者と小児科病棟における一人の障害の重い少年との出会いについて描いている。この少年と重ねた何気ない時間から、筆者は、もっと障害のある人の「内面」を知りたいと思うようになり、特別支援教育の世界へ飛び込んでいく。

家族以外の人には笑顔を見せたことがなかったAさんが、担任に心を開き、声かけに目尻を下げ、口を大きく開けて顔をほころばせたこと、入学まで自宅と病院しか知らなかったBさんが、生活リズムや体調を細やかに整えながら登校回数を増やし、学校生活を味わうようになったこと、表情の変化に乏しく、自分の世界に没入しがちだったCさんが、担任からのタッチングを受け入れ、だっこを求めるようになったこと——教育現場で、筆者が経験した子どもたちの豊かな個性の拡がりには、客観的な指標や数値では評価し得ないものであった。これが〈ヨコへの発達〉? しかし、実践現場にいた筆者には確信が持てないままであった。

〈ヨコへの発達〉の起源に迫る

感覚的にはわかるが、それが発達か?と問われると、首をひねってしまう、それでは〈ヨコ

への発達」とは何か？と問われると、明確な答えは分からない。そのもどかしさを解くために、筆者は〈ヨコへの発達〉の起源に迫ることにした。〈ヨコへの発達〉は、いつ、誰が、どこで、どのように提唱し始めた言葉なのか、素朴な疑問であるが、これらを突き止めるためには膨大な史資料を収集、読み込む必要があった。

まず、最初に取り組んだのが近江学園創設者である糸賀一雄の文献であった。糸賀について、「無知」だった著者は、著作集を購入するところから始め、文献収集の終盤には未公刊史資料も可能な限り渉猟した。糸賀が初めて〈ヨコへの発達〉について述べた文献（糸賀の言葉では「横軸の発達」と述べられている）を発見したときは、わが子を落としてしまいそうなくらいの大興奮であった（筆者はこの文献渉猟の作業を、生後まもない赤ん坊に、あるときは授乳しながら、またあるときは寝かしつけながら行っていた）。

本書の第1章では、その糸賀による〈ヨコへの発達〉の初出について述べている。そして第2章、3章では、糸賀が、岡崎英彦（近江学園医師、びわこ学園初代園長）、田中昌人（近江学園研究部主任）らとともに、〈ヨコへの発達〉という考え方を「共創」する過程について、「鍵」となる当時の療育実践を取り上げながら述べている。

〈ヨコへの発達〉結像後の展開

糸賀は、〈ヨコへの発達〉が像を結んだ2年後に、54歳の若さでこの世を去ってしまうのであるが、その思想と実践を引き継いだのが重症心身障害児施設びわこ学園であった。第4章では、「第一びわこ学園」の約半世紀余りにわたる療育実践について取り上げ、時代とともに

変化する対象児者の実態に対して、糸賀の思想をどのように継承・実践化していったのかについて述べている。

そして第5章で、筆者は自らの重症児療育実践に立ち返る。〈ヨコへの発達〉を知らずに、ただひたすら障害の重い子どもと向き合っていた当時の実践を、今なら、〈ヨコへの発達〉の歴史的、思想的、実践的な意味合いを理解した上で分析できる。現場で捉えていた子どもの個性や人間関係の広がり、まぎれもなく〈ヨコへの発達〉なのだ、確信を持っていえるようになった。

第1章から第4章は、筆者の博士論文「近江学園・びわこ学園における重症児者の発達保障—〈ヨコへの発達〉の歴史的・思想的・実践的的定位—」（2019年提出、『近江学園・びわこ学園における重症児者の発達保障—〈ヨコへの発達〉の歴史的・思想的・実践的的定位』風間書房、2020年2月刊行）のエッセンスを抜き出し、広く一般の方に読んでいただけるよう書き下ろしたものである。第5章は、特別支援学校教員時代の実践を〈ヨコへの発達〉という視点で分析するという、本書において独自に行った試みである。

実は本書は、筆者にとって初めての単著執筆への挑戦であった。日本標準・編集者の郷田さんに手取り足取り教えていただき、とても丁寧な校正、編集作業を行っていただきながら、出版に向けての作業を進めた。ネット上で出版の告知がなされたとき、いよいよ市場に出回り「買いました」というお知らせをいただいたとき、著者としてこの上なく嬉しい気持ちと同時に、大きな責任感を感じた。「上手く書けているかな」「ミスはないかな」「内容は読者の期待に耐えうるものだろうか」等と、感想をいただくまで、内心は不安でたまらなかったのだが、本書を手にとっていただいた方からは「とても

読みやすく、わかりやすかった」「教育現場の先生にも広めたい」というような嬉しいお声をいただき、大きく励まされた。ぜひ、一人でも多くの方に本書を読んでいただき、〈ヨコへの発達〉についての理解を深めるための一助となれば、この上ない喜びである。

最後に、余談になるが、本書の表紙にしたコスモスの絵は、糸賀の〈ヨコへの発達〉を探していたときに胸に抱いていた次男が書いてくれたものである。今では「ママの本が Amazon

に出てる！ 星5つつけといたろか!？」と、応援してくれる、小学校1年生になった。

(うない あかり)

注

- 1) 畑谷光代, 宮下俊彦 (1974) 「〈対談〉障害児保育をどう受けとめるか—保育の現場からその保育条件を探る」『季刊障害者問題研究』第48号, pp.3-15.
- 2) 茂木俊彦 (1975) 「障害乳幼児の発達保障をめぐる諸問題」『児童精神医学とその近接領域』第16巻第1号, p.66.